

受付番号005 (ポスター)

『オーラル未病』対策の重要性和『オーラルフレイル』との違い

○田中 俊樹・手嶋 昌雄

逗葉歯科医師会 医療法人聖徳会 田中歯科クリニック、神奈川県未病産業研究会

(背景)

近年、口腔疾患が、全身の健康状態に深く関わっていることが多くの研究で判明しています。2020年世界保健機関 (WHO)の発表では、2017年の世界負担疾患(Global Burden of Diseases)の研究報告を引用して、世界の354疾患の中で最も蔓延しているのは、口腔疾患であることを明らかにしました。推定患者数は世界人口の45% (約36億人)です。2017年に厚生労働省が発表した口腔不快感を自覚する人は、41% (推定約5000万人)でした。その中でも顎関節の不調や痛みのある人は、15.3% (推定1800万人)と報告しています。また、「歯周疾患」と「う蝕」の病名で受診している人は、合計で約600万人/日でした。残りの4400万人は、口腔の未病の潜在患者と言えます。これは、日本の国民病と言われている糖尿病の約2000万人の患者を遙かに上回る数字です。

(オーラル未病)

『未病』とは、2000年前より中国医学用語として用いられており、「健康と病気との恒常性が崩れ出した状態」のことです。東洋医学的定義では『自覚症状があるが、検査異常がない状態』、西洋医学的定義では、『検査異常があるが、自覚症状がない状態』としています。そして、再認識されなくてはならない4400万人『口腔未病者』の症状は、初期う蝕、歯肉出血、そして、咬み合わせの不調など年齢に関係なく出現する口腔機能の不調和の状態です。いわゆる口腔の前疾患状態 (Oral Pre-Disease)そのまま放置すると疾患に移行するリスクが高い状態です。それを2021年、口腔未病：『オーラル未病』と提言しました。

(フレイル：虚弱；Frailty)

2014年日本老年医学会で発表された『フレイル』の定義を要約すると
(1) 生体機能の衰退 (虚弱化) (2) 脳の機能低下 (3) 自立的な社会への不参加。
このうち一つでも欠けると、心身共に健康とは言えない高齢者のことを現しています。
2025年に75歳以上の人口が2000万人を超え、その内の約10% (200万人) が、この『フレイル』の適応者となると予想されています。

(オーラルフレイル)

高齢者の老化に伴う筋肉量の減少 (サルコペニア)は、口腔においては、咀嚼機能の低下、嚥下機能の低下及び発音障害などを引き起こします。またそれは、認知症の進行を早め、健康な自立的な社会参加に支障をきたす事になります。それに対して、この口腔状態改善対策の一例として、『あいうえおべー』などの筋肉強化体操などがあります。

(結論)

統計学的予想データより、未来の推定200万人の『オーラルフレイル』の適応者は、『オーラル未病』の4400万人の中に内在していることから、
『オーラル未病の定期的歯科検診』による『早期発見、早期改善』の対策事業や治療が、長期的視野において健康寿命延伸と国民医療費抑制につながる重要事項だと考察します。